

田らが I. V. は Ehrlich 癌と同様吉田肉腫細胞内で増殖し、細胞を破壊すると報告しており、両腫瘍に対する I. V. の抗腫瘍性を知りえたが、その差については今後さらに検討してみたい。その他、われわれは肺固型癌に対する I. V. の影響を知るため、Ehrlich 癌の肺移植を試みているが、点鼻接種、静注法ではそれぞれ肺腫瘍はみられず、肉眼的に腫瘍と思われた例の組織像は、気管支肺炎および水腫像などが主であり、さらに追求中である。

### む す び

1. I. V. は Ehrlich 癌および吉田肉腫に対して抗腫瘍性を示すことを追証しえたが、とくに I. V. を 24 時間後ないし同時に感染せしめた場合が著明である。

2. 抗腫瘍剤との比較では、とくに有意の差を認めなかったが、今後さらに例数を重ね、生化学面とくに細胞内作用機転の追求を行ない、さらに他の実験的腫瘍ならびに臨床例についても検討の予定である。

**質問** 浜崎 幸雄 (岡大病理)

Influenza V. はラットの肺癌発生を accelerate するという文献がでている。腹腔胸腔のエールリッヒ癌に対する Infeueuz V. の作用を研究したものならば肺癌学会では場ちがいの感がある。

**質問** 滝沢延次郎 (千大病理)

インフルエンザ・ウィールスが腫瘍組織内で増殖し

てそれにより癌細胞がこわれるとのことですが、その結果癌組織が肉芽組織でおきかえられておるところは見られましたか。

**質問** 渡辺 徹 (順天堂大学第 1 外科)

インフルエンザビールスを与えた時期による相違はないか。E 腹水癌移植前か移植後幾日後に与えるかによって生存率はかなり違うものと思うが。

**質問** 気賀 正巳 (昭和大放射線科)

Virus と midonijcine を比較した理由?

**応答** 岡安 大仁

① Ehrlich 腹水癌による胸腔内および肺内腫瘍作成の上、Influenza Virus の作用機転を追求するにとどまらず、その他の実験的・臨床的各種呼吸器腫瘍に対する、呼吸器 Virus の影響を追求したいという意図で行なっている。

**応答** 長野 孝暢

① 胸腔内腫瘍作成し、インフルエンザウイルスの影響をみるのが目的であり、今回はその前段階でインフルエンザウイルスの抗腫瘍性を知ることが出来たと考えている。

② ウイルスは腹水注入後、ほぼ同時または 24 時間後に注入した。その後の時期については今後さらに検討したい。

③ MMC は、ウイルスの影響と比較する意味で行なった。

## 統 計

### 最近 6 年間に経験した原発性肺癌の統計的観察

長崎大学医学部 箴島内科

箴島 四郎, 川原 和夫, 中野 正心  
石崎 驍, 牧山 弘孝, 加来 正敏  
北原 康平, 吉村 康

肺癌は非常に根治の難しい腫瘍であり、今日叫ばれている早期診断、早期治療に於いても根治し得る肺癌は数パーセントに過ぎない。早期診断、早期治療の難しさは肺癌の特異性にもとづくものである。

我々は最近六年間に入院した原発性肺癌患者について統計的観察を行ない、原発性肺癌の特異性に関して考察を加えた。

対象は昭和 35 年 1 月より昭和 41 年 1 月までに入院した原発性肺癌と思われる患者の内、その予後、手術、或いは剖検を行ない病理組織を追求し、確診の得られた 75 症例を調査対象とした。

1) 性別

男性 49 人, 女性 26 人

2) 年齢構成

(表 1) 40 才, 50 才, 60 才代に多い。

3) 喫煙関係

非喫煙者が男性に 13 人, 女性に 20 人, 20 本未満の喫煙者は男女合わせて 18 人, 20 本以上の喫煙者は男のみで, 24 人, 20 本を Borderline として分けると 0~19 本までの喫煙者は 51 人, 20 本以上の喫煙者が 24 人で煙草との相関関係はつかめなかった。

4) 訪医の動機

症状ありて訪医 61 人, 81.3%, 集検にて発見 10 人, 13.4%, 他疾患診療中に発見 3 人 5.3%。

5) 前医の診断

肺結核 22 人, 29.3%, 肺癌 14 人, 18.6%, 気管支炎 7 人, 9.4%, 肋膜炎 5 人, 6.7%, 感冒 5 人, 6.7%, 肋間神経痛症 4 人, 5.4%, 其他 12 人。

## 6) 初発症状

主なるものは、咳嗽52%、喀痰24%、胸背痛12%、血痰9.3%、全身倦怠感8%、呼吸困難6.6%、等であった。

## 7) 入院時主訴

主なるものは、咳嗽48%、喀痰24%、胸背痛24%、血痰17.3%、呼吸困難8%、等であった。

## 8) 入院時自覚症状

主なるものは、咳嗽78%、喀痰76%、全身倦怠感63%、食思不振50%、胸背痛48%、るいそう44.5%、血痰40.5%、肩こり35.5%、等であった。

## 9) レ線分類

肺門腫瘤型17例、22.6%、肺門浸潤型2例、2.7%、肺野腫瘤型39例、52%、肺野浸潤型8例、10.6%、肋膜型7例、9.3%、撒布型2例、2.7%、等で肺野腫瘤型が半数以上を占め、肺門腫瘤型がこれに次ぎ、腫瘍型が圧倒的に多い。

## 10) レ線随伴陰影

無気肺45例、胸水26例、空洞14例、肺気腫6例、肺炎5例、等であった。

## 11) 原発部位

右肺に於いては、上葉16例、21%、中葉6例、8.5%、下葉13例、18%、左肺では、上葉24例、34%、下葉10例、14%、等で上葉に原発したのが半数以上を占める。

## 12) 細胞診

細胞診は1回につき3枚の Preparete を検鏡し、回数と陽性率との関係は(表2) 1回で26.7%、3回で46.4%、5回で53.6%、7回で60.7%の陽性率になっている。

病理組織別喀痰細胞診陽性率は扁平上皮癌70%、腺癌33.4%、未分化癌61.1%の陽性率で腺癌の陽性率がきわめて悪い。

## 13) 制癌剤による治療

75例中制癌剤による治療は40例で、主なる制癌剤はMMC12例、Endoxan. 12例、MMCとEndoxan併用5例、Nitromin 3例となっている。

投与法はMMC 一日量0.04mg/kg 連日投与と一日量0.16mg/kg、週2回投与、Endoxan 一日量2mg/kg連日投与、又は6mg/kg 週2回投与を行ない、臨床上、並びにレ線上改善を示したと思われた症例はMMC投与群12例中2例、Endoxan投与群例中2例であった。

制癌剤使用例は肺癌研究会病期分類のⅢ、Ⅳ期に属するもので、制癌剤使用後の平均生存日数は扁平上皮癌107日、腺癌95日、未分化癌103日で病理組織

別による差はなかった。

## 14) 予後

Retro-radiographic に追求し得た症例につき、推定発病日よりの平均生存月数は扁平上皮癌12.6カ月、腺癌9.5カ月、未分化癌6カ月であった。

## 15) 病理組織分類

扁平上皮癌20例、腺癌18例、未分化癌19例であり、病理組織では略々同数で差はなかった。

## 16) 病理組織より見た臓器への転移

原発性肺癌の転移臓器は、胸腎内リンパ腺92.3%、肋膜43.6%、一側肺より他側肺転移30.8%、肝臓28.2%、副腎17.9%、脳17.9%、腎臓12.8%、胸椎10.2%だった。又病理組織より見た臓器への転移は(表3)の如くなっており、扁平上皮癌では一側肺より他側肺転移が56.3%あり、腺癌では25%、未分化癌では1例もなかった。

肋膜転移は腺癌66.7%、扁平上皮癌37.5%、未分化癌27.3%で腺癌に多い。

肝臓転移は未分化癌45.5%、扁平上皮癌25%、腺癌16.7%で未分化癌に肝臓転移の多い傾向がある。

副腎転移は扁平上皮癌31.3%、未分化癌9.1%、腺癌8.3%で扁平上皮癌に多い傾向を認めた。

## 追加 戸栗 栄三(慈恵医大)

肺癌の組織学的分類は病理学者により、明確な分類を行ない、臨床教室は病理学者の分類に従うことが必要であると思われる。

扁平上皮癌の細胞の悪生度に依りさらによく分類すべきことは必要だと思われます。

## 追加 滝沢延次郎(千大病理)

肺癌の病理組織学的分類による統計的結果をお示しになりましたが、既に肺癌研究会に於て委員会を組織して扁平上皮癌、腺癌、未分化癌の各々の中に比較的良性のものから極めて悪性のもまであり、それを各型の癌について夫々3段階に分けておりますので、上述の3型に分けるだけでなく、その各々に病理学的に悪性度の点からの分類を加えて統計をとっていただくのが合理的と考えます。

## 応答 吉村 康

御教示有難うございました。

病理と協力いたしまして、今後病理組織分類を異型度の段階に応じた分類を行ないたいと思います。